

北海道胆振東部地震から4年 全半壊被害の真正寺、実成寺が本堂再建

2018年9月6日に発生した「平成30年北海道胆振東部地震」から4年が経過した。北海道教区胆振組内の5カ寺に被害が発生したが、特に、震源地・厚真町の真正寺（阿部智之住職）は本堂が5度傾き全壊の判定を受け、また安平町の実成寺（櫻井唯紹住職）も本堂が基礎ごと5メートルずれる大規模半壊の被害を受けた。多数の門信徒も被災する厳しい状況下で「みんなの念仏道場を守りたい」と復興に向けて取り組みを続けてきた両寺の4年間の軌跡を紹介する。

厚真町・真正寺 復興完成法要営む

真正寺は今年9月3日 銅板葺きで、正面9間、日、本堂の復興完成法 奥行き10間の木造建物を報恩講にあわせて 築。基礎をコンクリートで固め、多数の杭を地中に打ち込んだ。本



堂の柱は再利用した。復興への思いを語ってか、内陣の宮殿などは修復し、これまでガラ

ス戸だった本堂の正面の面脇を漆喰壁に造り替えて耐震強度を高め

た。阿部住職は表白で「堂々たる伽藍と光に満ちたお内陣の荘厳と

歩みを進めることができたのも、宗門、北海道をはじめ全国のご門徒、ご寺院、有縁の皆さまからの温かいお気持のたまもの」と謝意を表し、「仏法聴聞の道場として、また地域との縁づくりにも

本堂が広く親しまれま

すよう、努めていく所存です」と尊前に誓った。同寺では、門徒の中村ミヨさん(当時76)が自宅の裏山が崩落して亡くなった。約4割の門徒の自宅が全壊・大規模半壊・半壊した。地震から1カ月後に本紙の取材に応じた同寺

門徒総代長の宮下重雄さん(当時73)は、「多くの門徒が被災しており、そうした中でお寺を復興するのは大変だが、住職と門徒が一体となってそれぞれがやるべきことを精いっぱいやるだけ」と一語ずつ噛みしめるように



安平町・実成寺 仏具の搬入終える

実成寺の本堂は築40年と比較的新しかったため、地震の激しい揺れに耐えきれずに建物全壊し、友人、地域の人々の支援、そして3人の一級建築士に調査を依頼したが「残念ながらもう使えない」と口をそろえた

同寺では門徒の6割が被災したが、「本堂を復興しなければ」との思いで19年3月、責任者の小坂誠士さん(故人)を委員長とする復興委員会が発足した。

厳しい条件の下、復興に向けて歩もうとする櫻井住職の背中を押

った旧本堂を19年12月に解体し、木造平屋建ての新本堂の建設に着工。延床面積は131・5坪と旧本堂より少し広くなった(写真左)。外陣にはカーペットを敷き、いす席で約80人が参拜できる。基礎を強化するため170本以上の杭が地下に打ち込まれている。今年9月の彼岸前に仏具の搬入を終えた(同上)。

櫻井住職は「胆振組の被災寺院、門徒をお見舞いに来てくださったご門主に復興へのお力をいただいた。自坊が被災して地域の人たちの避難所になれなかったのがとても残念だった。新たな本堂は仏事だけでなく、地域の住民に開放していきたい」と話す。

